

## 往復書簡集 三

笠 井 純 一

### 凡 例

- 一、本稿は、南方熊楠と宮武省三の間に交わされた書簡のうち、大正十三年三月十一日から同月二十六日までの、現存する全書簡を翻刻するものである。
  - 一、書簡は、なるべく原文通り翻刻することに努めた。但し、解読の便をはかって句読点や括弧を補い、漢文に返り点を付した場合がある。
  - 一、ハガキ表面の下部に記入された日付は、本文（裏面）冒頭に付した。これについては、本稿挿図を参照されたい。
  - 一、書簡中の資料引用は必ずしも正確でない場合があるが、原文のままとした。
  - 一、書簡中に引用された論文名には「」を、書籍・雑誌名には「」を付した。
  - 一、南方書簡中には、段落の区切りを改行せず、○印等で示した箇所がある。本稿ではこれらの符合を除き、段落を改めた。
- 一、漢字は原則として新字体・通行の字体を用いた。但し両者慣用の俗字や、出版・出板、大阪・大坂などの混用は統一せず残した場合もある。
  - 一、ら(より)・厶(とも)・片(とき)などの文字は、原型を生かした。
  - 一、抹消された文字のうち判読できるものについては、左傍に、印を付して表記した場合がある。
  - 一、明らかな誤字には右傍に(ママ)を付し、脱字は「」内に補った。
  - 一、振りがなは、カタカナは原文のもので、ひらがなは編者の付したものである。漢字で表記された外国地名等に編者がカタカナの振りがなを付す場合には、これを「」内におさめた。
  - 一、外国語のカタカナ表記の読点は、中黒に改めた。
  - 一、図面は原則として原位置においたが、文中に「\*」「\*\*」等の符合で示し、欄外に一括掲載した場合もある。
  - 一、文中にはアジア諸国の呼称などに不適切な表現があり、不当な封建的差別を示す名辞も散見するが、資料集としての本稿の性格上、原則として訂正しなかった。

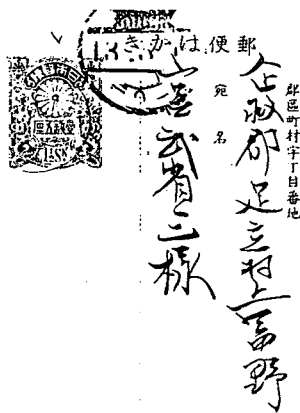
南一〇 (三月十一日付葉書)

大正十三年三月十一日朝十一時  
 拝啓 別封ロンドンニテ一九〇〇年九月一日、二十二日、十月廿七日ニ発行セル Notes & Queries 三冊差上候。小生ノ「神足考」出テ居リ候。是レハ本邦ニハ一向聞エヌ者乍ラ、海外ニテハ人類学者及ビ民俗学者間ニ一寸有名ナルモノニ相成居リ候。然ル所口、今度此雑誌ノ旧本共アマリニ多ク(タシカ一八四七年ニ創刊故、凡ソ四千号以上ツッキ居リ)倉敷料高クツク故、旧本ヲ頗ル遺憾乍ラ悉ク破毀スル旨通知有レ之候。小生ハ一八九八年頃ニ特別寄書家トシ凡ソ三百篇斗リ出し来リ候。ソレヲ一一只今買ヒトリ置ク料金無レ之、遺憾ナガラ破毀ニマカセ申候。手前ニモ少々旧本貯ヘ置キ候モ、ソレノ配布シ了リ、此「神足考」ハ小生方エノ扣エノ分ノ外ニ二本(六冊)ノコリ有レ之候テ、一本ハ徳川頼倫侯ヘ、一本ハ貴下ヘ今度配布申上候間、珍物トシ御保存置キ被レ下度候。今後買ハントナラバ全輯ヲ買フヲ要スル故、安ク凡全輯一ツニ付四百円ホドハカ、リ申候。モシ御入用ナクハ御返シ被レ下度候。  
 早々敬具、

南一一 (三月十一日付葉書)

大正十三年三月十一日夜八時前  
 拝啓 先刻小生ノ「神足考」ノ出タル雑誌『ノーツ・エンド・キー

本府縣名 (配達局名)  
 福岡縣 糟屋郡 小倉町 丁目番地



右ノ一封ハ印紙ヲ貼リ有リシモノト心得、印紙ナシニ他ノ郵便物ト共ニ投函シタル旨話シ申候。マコトニ不ニ相濟ニ儀ト存候モ致シ方無レ之、何卒安着御受領ノ上ハ一寸御報知ヲ煩ハシ奉リ(度)候也。

敬具

リース 三冊差出シ候所口、只今ニ至リ其使ニ立シ女、忙キ候マ、右ノ一封ハ印紙ヲ貼リ有リシモノト心得、印紙ナシニ他ノ郵便物ト共ニ投函シタル旨話シ申候。マコトニ不ニ相濟ニ儀ト存候モ致シ方無レ之、何卒安着御受領ノ上ハ一寸御報知ヲ煩ハシ奉リ(度)候也。

右下女ハ拙家ヘ三日前初テ奉公ニ来リシ者ニテ、カヤウノ事ニ全く不慣レナリ。但し印紙貼ラズニ投函セシ旨、真直ニ申立候段、奇特ニ有レ之候。

南一二 (三月十二日付封書)

故福本日南話シニ、幼時福岡城野辺ヘトキ多く来リ、紅色ノ羽ヲ落ス。ソレヲ破魔弓ノ矢ニヘゲ用シ由、今モ此鳥貴地方ニア

リヤ。当地方ニハ一向ナキモノナリ。

大正十三年三月十二日午前十一時

宮武省三様

南方熊楠

再拜

拝復 九日付御状只今拜見。三浦健一氏も御寄付金忝く、特ニ郵便料迄御志ニ預り候段奉ニ感謝一候。乃チ領収証封入候間、然べく御礼御伝言御手渡シ奉ニ願上二候。一昨日及昨日日米米國ノ未知人も寄付金有レ之、彼ノ一文錢ト髪一筋ノ貴論ニ從ヒ、不屈撓勸化致候ハ、必ズ素志ヲ貫ク事ト存候ハ、昨夜モ或ル男爵も千円斗リ寄付受合レ申候状到来致候。ワケノ分ラヌハ当世ノ所謂金満家ニテ、和歌山ハ小生ノ生レタ処ナルニ、同所ノ小生ノ骨肉共ガ最初小生ガ進マザルニ、憇憑ノ此事ヲ思立シメ乍ラ、今ニ一文モ違背ノ出金セザル事ニ有レ之、近日其ノ催促ニ上ル積リニ有レ之候。事長クナラバ其間ニ彼地方ノ藻ヲ研究セント只今顕微鏡ノ修復ヲ東京へ詔へ居リ、又事長クナラバ奔走ノ片手間ニ民俗学入門ヲ編シ、政教社又ハ下出書店も出版スルカ、イツソ自分も出版セント存居申候。吾国ニハ民俗学ヲ彼是レイフモノ多キモ、其学ノ梗概大要ヲ示スモノ一モ出ズ。遺憾千万ニ存申候。小生ハ海外ニ久シク居リシ故、欧米ヤ他国事ニ随分目ガ届キ居ルモ、帰朝来コンナ汽車モナキ処ニ籠居シ居リシ為メ、日本ノ事ハ纔カニ其方ノ雜誌等デ少々知ニル過ギズ。雜誌杯ノ内ニハ、タシカナラヌ事又虚飾ノ文多ク、一向アテニ不レ成候。小生右入門ノ稿本出来候ハ、(主トノ外国ノ事ノミ書ク故) 貰下エ送り可ニ申上レ貴下御存知ノ件々ヲ其条々ニ応ジ、一一御書加へ被レ下度候。小生ハ之ヲ自分ノ勞も出ルモノトセズ、序文ニ又本文中ニ一一貰下も承ハ

リシ旨ヲ明記可レ致候。貝原先生ノ『大和本草』序ニモ見エ候通り、此ノ Acknowledgement ノ一事、本邦人ニハ昔シヨリダガ、近来一層無茶苦茶ニ有レ之、御承知ナランガ、小生多年『一切経』中も調べ上タル事共ヲ『郷土研究』ニ出セシヲ、何ノ断リモナク芳賀矢一氏(小生旧同学)ノ『攷証今昔物語』ノ末ニ数十頁ニ印刷シアリ。ソレガ小生ノ腦も出シ事ヲ、序文ニモ文中ニモ一切書テナク候。カ、ル人が忠孝ノ教育ノト言ヒハツタ処ガ、何ノ功モナキハ分り切タ事ニ候。實ニ不徳極マル事ニ御座候。

貴下ハ本邦ノ民族ノ活字書ナルベシ。何ニテモ御了知ノ事多シ。書物(殊ニ本邦ノ)ニ書タル事ハ、イヤニ氣取リテ本邦ノ良風ニ誇ラントシ、又ハ民俗ヲ教訓ニ用ヒントスル杯、見当違ヒノ事多キ故、一向學問ノ足シニハナリ不レ申候。

ウンキウノ事大ニ難レ有存申候。卵ノ所在等モ貴書ニヨリ大イニ分り申候。是レハ蜘蛛ノ類ニテ蟹ヤ蝦ノ類ニ非ル故、卵ノ所在モカハル事ト存申候。『古語拾遺』(?)ニ白蛤ヲウムキト訓シアリ、何ノ事カ分ラヌガ兎ニ角海産物ニ古代もウムキトイフモノアリシト丈ハ分り申候(『和名抄』ニ海蛤ウムキノカヒ)。ウンキウモ是ニ縁アル名ナルニヤ。

海月ハオクリ被レ下ニ及バス。小生及一族ハ左様ノモノヲキラヒニ候。淡水クラゲハ熱地ニハ多キモノニテ、曾テ南米もとり来リシ水草ヲ英國ノキウノ皇立植物園ノ大暖室ニ植シニ、其池ノ中も見出サレタルヲ見シ事有レ之候。支那デ海母トイハズ、水母トイフも考ルニ、淡水クラゲナドハ支那人ガ古クも知り居リシ事ト存候。河豚ナドモ海産ノモノナルニ、淡水ノモノ、如ク河豚ト名付シハ不都合ナ

ト、日本ノ本草書ニ見エ候モ、是又広イ世間ヲ知ザルノ論デ、支那ニハ淡水ニ河豚ガ産スルニ候(印度ヤアルゼンチンニハ江豚ガ川ニスミ、又西アジアニハオットセイガ湖ニスミ、呂宋ニモ湖ニ海蛇ガスミ申候。南米デハ川ニ鱻ガスミ杯致シ、豪洲ニハ淡水ニフカガスミ申候)。

貴書ノ如クナラバドテハ大陰唇ニ御座候。

キタゴロノ事又面白シ。何ノ意味カ分ラサルモ、九州ニモキタゴトイフ魚アル事ハ知り居リ申候。イハッヤハリ糞ノ形ニ御座候。当地方ニテハウツボト申候。海ニアルヲ見ルニ楯黃ニテ丁度糞ノ如シ。膳碗ノ一件、貴書ノ趣大ニ小生ノ参考ニ相成申候。

祇園縁起ハ小生イツモ座右ニ持居ルガ、牛玉ノ事ハ貴書ニヨリ初テ氣付キ申候。此事ハトクト考ヘ可レ申候。

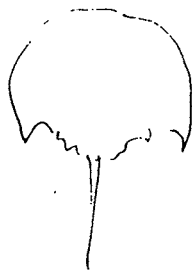
『集古』ハ東京府渋谷町青山南町七丁目ニ番地三浦清三郎氏ヘ小生ノ紹介ナリト見本ヲ求メラルレバ、必ズ一二冊クレ申候。アマリ面白キモノニ非ルモ、隔月ニ催ホス「集古会」出品目録中ニ心得ニナル事多シ。小生ハ林若樹・三村清三郎二氏知人ナルニ付、イツモ投書致居リ候。

井ノ中も金精云々ノ事ニ似タル事当地方ニモアリ。只今此書齋ト竹垣一重隔テ、大ナル邸アリ。ソレハ多屋ト申シ当町第二ノ大富者也。其家ノ第三女ガ嫁シアル家ハ、通称亡者嘉ト申ス。先祖ハ貧人ナリシニ、移リ行キシ家ノ井戸も毎度ヘンナモノ出ル。其人ノヲ尋シニ、吾レハ此地ニ昔シスミシガ大金ヲ此井ニ埋メアリ。其執着ニテ今ニ得脱セズトノ事、因テ井ヲ浚ヘシニ大金ヲ獲、ソノ金デ亡者ヲ弔ヒ追福ノ末、用ヒテ地処ヲ買ヒ大富トナリシトノ事ニ候。

和歌山市ニモ昔シハ貴殿ノ話ニ似タル笑話アリ。松二月、下り藤ハ貴話ト同ジク、第三ノミ違フ。海鼠デナクテカレヒガ釣下タルムシロニ身ヲ付ケ、煙草屋ノ看板トハドウデアロウト云シ由、コレハタバコノ葉ヲ一枚カンバンニ貼り又画キシヨイヒシ事ト存候。

小生ハ前年四年ホドカ、リテ『一切経』ヲ通覽シ、書抜キ索引見出シヲ作りシガ、只今顕微鏡修繕ニヤリ致シ方ナキ故、『アラビヤンナイト』ヲ通覽シ、索引ヲ作り居リ候。中々ノ大事業ニ御座候。『アラビヤンナイト』ハ浩瀚ノモノニテ、民俗学ニ関セル事多シ。日本ニハ完本ヲ持タ人ハ無ルベシト存申候。

ウンキウハ当地ニハ甚ダ少ナシ。四五年ニ一疋上ル位ノ事ナリ。



貴下モシ至ツテ小キモノ見当ラバ一疋デモ御送り被レ下度候。米國デハ、コレホドノモノヲヨク売り居リ、小生モ一疋持チ居シガ失ヒ了リ申候。大キナ品ハ置キ処ナキ故不入用ニ候。九州ニメクワジヤトイフモノアリ。太古ノ動物ノ遺リシモノニテ至ツテ死ニニクキモノ、由、メクワジヤ目ノ毒ト申シ目ニ悪キ由。此モノニハ何カ伝説有レ之候ヤ。

山椒ト生姜ハ、当地方ニハ上セル故、眼ニ大毒ノ由申候。

早々敬具

南一三 (三月十四日付葉書)

大正十三年三月十四日午後四時前



ヲシドリノ思ヒ羽ト申シ、\*コナ風ノ羽アリ。此羽ノ形ヲ洋人ハ船ニ似タリトシ、此鳥ノ学名ヲ *Alcedo galericulata* ト申シ候。『曾我物語』ニハ、モト剣羽ト申セシヲ、夫婦共ニ宋王ニ殺サレテ此鳥ト成シモ、思ヒ羽ト名ケタトアリシ。『新撰六帖』「池水ニヲシノ劍羽ソハタテ、妻争ソヒノケシキ烈シモ」ナトヲ見ルニ、オシドリノ雄ハ、此羽ヲ以テ相闘フ用ニ供スル杯見エ申候。コレハ當時京都杯ノ池ニ、冬中此鳥多ク集マリ、今ノ如ク天庭ニ持タル、ヤウナ事ナカリシ故、妻争ヒニ相闘フ片、丁度此羽ガ剣ヲ揮フ如ク見エシ故ノ事ト存候。紀州和歌山デハ小生幼時、此羽ヲ婦人ノ鏡ノフタナドニ入レ、夫婦中ヨキ守リノ由申シタリ。只今ハソナ事ヲ聞ズ。此事ヲ小生用事有テ近頃調ベシニ一向書物ニ見エズ(タマムシヲオシロヒノ箱ニ入レ、ナギノ葉ヲ鏡底ニ藏スル等ハ見ユレ也)。貴下維新前ノ書ナラバ何ノ書デモ宜シク、此事ヲ一言デモノセタル書アラバ、其所ヲ抜記シ御教エ被レ下度候。

過日小生ノ「神足考」ヲ、下女出カハリニテ出ユクモノニ托シ候所、其下女拙宅ニ二年半居リシ者ニテ別レヲ惜ミ、球ノ如キ涙ヲオトシ、ナキナガラ行ク故、ソレデハ外見悪シ、先ヅ其姉ノ方ヘユキ、姿ヲツクレヒテ後チ、村ヘ帰レト命ジ、乃チ姉方ヘユキ候。ソレニテ取紛レ印紙貼ラズニ出セシ事ト其夜知レ申候。此出替リト申ス事

往復書簡集 (3)

(笠井純一)

貴地方只今何月ニスル事ニヤ。今ハ東京辺ニハ、ソナ事ナキ由。

宮一一 (三月十六日付繪葉書)

大正十三年三月十六日

拜啓 Notes & Queries 御送り被レ下難レ有拜受致しました。御芳情の程何とも御礼の申様も御座ません。早速「神足考」も只今拝読致してゐます。昨夕は又、玉書も拝誦致しました。御返事可ニ申上ニ事数々御座いますが、本日の日曜日は公用にて日中は丸潰れ、夜分は知人の遠行を下関迄見送る事となりてゐますので、四五日中に更め御挨拶仕りますが、不取敢ニ御礼申上度く一筆認めた次第で御座います。

頓首々

宮一二 (三月十八日付封書)

大正十三年三月十八日(今日は彼岸の入、播州にて彼岸の雨は大雨多しとて、「彼岸の大糞流し」といふ諺があります)。

先日は、Notes & Queries 態々御送り下さいまして、何寄り嬉敷存じました。全輯取揃へば、四百円もするとの御咄、残念ながら見送らなければなりませんまいが、せめて三部なりとも快読する事が出来ますのは御芳情のしからしむるところと、厚く御礼申し上げます。本日は百四十号を讀破致しまして、玉稿の「神足考」を非常に面白

五

く拝見致しました。

扱て、御照会の「メカジャ」が目の毒じやと曰ふ事は、初耳でございました。大正十一年八月の『民族と歴史』に、私は「魚介雑俎」と曰ふ題で、つまらぬものを掲げ、其の中に「佐賀地方に『玉球タマキウの息つく』若くは『メカジャのごとして、玉球の息つく』といふ俚諺がある。大法螺吹く意義で、其謂は玉球は美味なるも、介殻の大なる割合に内脛は至て小さく、要するに内容はメカジャ（シヤミセン貝の方言で、蜆貝に似たる小さき貝）の如く貧弱じやが図体は大きいとて、大風呂敷ひろげる者の比喻に用られるやうになつたものである。メカジャは食用にも供せられるが、人によりては直ぐ食あたりする者もあるので、誰れ彼れも喫はず、専ら農家では之を麦の肥しとしてゐる。麦の季節に佐賀の村落を歩るき臭氣鼻を突くものは、此のメカジャの腐敗した臭ひである」云々と申して置きましたが、「メカジャ」に就ては、是以上の事は知りませんから、念頭に置きまして、他日同地方に出かけます折、取調御返事致しましょう。

「目の毒」から思出す事は、鯛をのぞき魚類の目玉には毒多く、関門の名物河豚の目玉の如きも、鶏にくはさすと忽ち死すと申します。「かわはぎ」（当地にては一名「バクチイヲ」と曰ふ。皮を剥ぐ為なり）の目玉もよくないと魚屋連は申します。大阪の俚語に、「こい茶目の毒、しやくに毒」と言ふのがあります。世には眼に見て毒なるもの、食物にて目の毒なる物も、随分多かるべく、又眼疾に對する禁厭、出雲一畑薬師・宮崎生目八幡・南河内滝谷不動・山城西山柳谷寺の観音等、盲者の崇信する神仏、それからそれへとたどると、面白い咄が纏ることだらうと思ひます（貴地方にては、「ハマ

ラメ」と言ふ事はございますか。大阪より関西地方一帯にて耳にする卑言にて、年が寄ると第一に齒が弱り、次に陽根、次に眼力が衰ふるを、かく簡単に「ハマラメ」と申すのです。

別封の写真は、大正九年七月三十一日、私が宇佐八幡の喧嘩祭（此の祭りの記事は桂川氏に送りしも、『土の鈴』休刊の爲め其儘になつてゐます）を観に行つたとき、境内の「駒の足あと」と呼ばれる石を撮したのですが、私は性来不器用で写真は下手（見込みがないから今も中止してゐます）故、見にくいですが、画中円石の右方に黒点見ゆるは、神馬の足あととなりと申され、眼疾ある者、此の石の周圍にある三泉（方形に石をたたみたる泉三ヶ所あり。画中には其の一つだけうつる）の靈水を汲て、此の石上の黒石即ち凹所に入れ、局部にぬれば癒るとの俗信があります。

『益軒全集』の「扶桑記勝」に、「豊前おもと山は、宇佐宮の近境に有り。靈水山上にあり。清き小泉なり。つねにかれず。山上に具足岩あり。甲冑の形の如し。山上の大石に馬蹄のあと有り。不動の立像、杉の木にて、肢体皆杉木理有り。奇特なり……。山下より山上は一里有り。山上より遠方よく見ゆ。四国も見ゆ。女人は上れ共一宿をゆるさず」とありますから、山上にも馬蹄のあとと在る事と思ひますが、私は折角此の御許山に登山しながら、案内者が十五六の子供でしたから、どれが馬蹄のあととやら分らずにしまひましたのは残念でした。山上の大石に、彼は直径一寸五分位の円形の凹所あり、清水たまり、傍に小さき杓子をそへてくむ便に供してありますが、八幡の神靈は此辺にお降りなつたと申します。此の山には蛇すむと言ひ、参拝者其蛇を見たとときは金持となり、縁起よしの口碑が

あるそうです。案内の子供は「あの辺の笹の繁る所」に時々蛇が見えろと言ふと方角を指すので、石を二三遍飛ばして、じやうだん半分に付近で休憩しましたが、同行の一人が前晚宿屋でくうた魚がわることだったので、それこそほんとに河魚の疾で、ピリ／＼途中、神山を穢したのは、今尚勿体ない事をしたものじやと、毎年八幡の夏祭がくると思出します。

Human Foot Prints は、日本にても諸所にて耳に致しますが、四年前家人を大和当麻寺に詣らしめしに、此の寺にも中将姫の足あととなりと称さる石ありとて、語るところに由れば、姫は例の雲雀山より帰家せしも、発心して仏道にいらむとし、当麻寺に詣りしに、女人禁制なりとて、老僧いるを許さざりしかば、一心不乱に觀世音を祈念し、願のかなふか、叶はぬかを試めすべく、石上を踏みしに、石は凹みて足跡がつきしものなりと。此のとき姫の凡人たらざる容子を見て、姫の入山を許し、姫は中の坊実雅阿闍梨を師とたのみ、剃髪せられ、「くろかみをすり落してぞ尼となり、たへまのてらに入るぞうれしき」とよまれ、又、雲雀山を下るとき、なつかしさの余り、袂にいられて持ち帰られし松を、此の寺へも持ち運びて境内に植付け、「植すてる松に心があるならば、枝はふるとも根はさしまじき」と讀しと。後の歌の意義は、姫は親孝行を忘れず、松に向て、枝はふるとも、即ち頭は奈良の方に向ても、根たる足は向けてくれるなと云ふたもので、不思議に此の松は、根を奈良の方へはらず、却々の大木となりしが、いつぞや落雷ありて、今は切り株だけのこるとの事なるが、是は寺の案内者が、「立板に水」式に述るを、其儘家人が鵜呑に覚えてゐるのであつて、足あととはとても姫君の足とは思は

れぬ程大なるが滑稽なりと曰へり（当麻寺に就ては色々家人の調ぶる面白き咄もあるも茲に省略）。此の松を「たもとの松」又は来迎の松といふと。

カブトガニは、夏季でないと却々捕れませんが、前報の通り筑前黒崎海岸でよくとれるそうですから、人に頼んでくつもりです。

「二月八月の鰕割ちぬ」と申し、此の両月はチヌを煮ると、鍋がチリ／＼割れる程の油があり、チヌ釣の季ですから例の「ハチガメ」の「ウンキウ」が餌として物色せられ、手に入る事あるだらうと思つてゐます。大正十一年二月の『教育画報』に、「英国にて Kings Crab 又は Home Shbe Crab、支那にて鰕魚、九州にてウンキウ云々」との記事がありますが、此の雑誌今石油箱に仕舞込み（小生の家までせまく、差当り不要の書・雑誌は石油箱に入れて櫛側に重ね、肝腎のとき取出し見るに面倒なり。家賃十五円の侘住居致方なし。此雑誌内容充実せず、昨年限り講読を中止す）、更め見る得ざるも、当地方にては矢張筑前同様「ハチガメ」と申し、老人の咄によると、甲硬き故甲を其の儘鍋代りとして火にかけ、肉を煮て食へば一段美味なりと申します。又此の肉は痔疾によしと申しますが、『訓蒙図彙』に「鰕は痔漏を治す。虫をころす。多く食へば、咳および瘡をはつす」とあります。

お咄の通り他人の作を Ritate して知らぬ顔にゐる学者の多きは、不徳義極まる事と存じます。「かき氣とぬすみ氣のない者はいない」と俚諺に申せど、Culture のあるべき普通の学者が、剽窃して猫婆々をさめるは面にくい事で、先年東京にて発行する『香川之友』と称する雑誌に、私が『郷土研究』に投じた卑稿を一言一句其儘に

記した香西某といふ男があります。どここの馬の骨か知りませんが、私は大に憤慨しましたが、家人がなだめるので我慢しました。成程、土俗研究資料には、報告者の占有すべきものでないもの、在るは事実だが、然し、執筆者が報告する迄に蒐集したものの中には、一方ならず苦心の存するもの、在る事は、此の道にはいつて居る者でない、と分らんと見えます。

安来節の事、一部分だけ分りました。

「なぞ／＼かけましょう。なになりと、かけたるなぞなら解きもしよう。若しも知らない其のときは、かけたる御先生ゴセシキにあげて聞く。サーサかけましょう。なんなりと」

是から弥々なぞにかりて、「出雲の神の鈴とかけて、なにと解く」と言ふ塩梅に行くのだそうです。最初の方は、先般の御来示に大体似寄りてゐますが、後の本文は、右の一節を知らしてくれた本人が忘れたそうで、取調方を依頼して置きました。

御手紙に由れば、某男爵家より千円寄送の来状ありました由、余所事ながら嬉しく存じます。一体日本人は、貨幣に対する心理状態が、どうも私には不可解です。彼等は単に贅沢せむが為に貨殖に耽ける如うに見えます。金は無いと言ふ者も、金の工面が出来ないと言ふ者も、交際とか何とかつまらぬ名義で浪費し、一向有利な道に使用するの法を知らません如うです。卑諺に「金の工面と下つきオソソこんな仕にくいものはない」と言ふが在て、事実金の工面は六箇數事なるも、日本人は、つまらぬ迷信的事に莫大な金を寄与する者あり、金はないと言ふ者が乞食に小恵したり、実に心がけの分らぬ人種と思ひます。海外で排日の声高きも、日本人本来の心がけが

悪いからでありますまいか（『五雑俎』に「富者多レ慳、非レ慳不レ能レ富也。富者多レ愚、非レ愚不レ能レ富也。是此子雲所謂圈鹿欄牛者也」とは至言と存じます）。

御照会の「トキ」は福岡地方で「トキノトリ」と申します。「トキノトリ」と言へば、大抵の人は知つてゐますが、どう曰ふ種類の鳥か、名だけは聞くが姿は知らないと申す者が多いです。此の地方は破魔弓の今尚はやる地方ですから（私の郷里にては最早すたる）御咄の如き言伝があるかも知れません。いづれ取調御返事致します。

澎湖島に産する文石はお持たですか。石の中に大小の玉をふくむもので、此玉をくだきてカウスボタンなどにして売てゐます。此の玉の事、『西京雜記』にある由（此本今手許になき故、抄録出来ざるも）、石は手許にありますから御入用ならば、いつなりと御贈り致します。

鴛鴦の船舵の如き小羽を劍羽と曰ひ、是が雄のみにあることは承知してゐますが、貴地方にて是を婦人が鏡の蓋などに入れ、夫婦中よき守りとした事は初めて承りました。たまむしを鏡奩に入れる風ありし事は『倭訓栞』に見え、豊前では海馬を鏡奩に納むる事（是は鏡が曇らぬ為なりと）あるは、右「魚介雜俎」（『民族と歴史』卑稿）も掲げましたが、思羽を納めし事は初耳でした。他日読書の際に注意してをきましよう。『訓蒙図彙大成』には、をしどりの絵をかきながら思羽の事を語らず、単に「鴛鴦は大き鴨の如し。色黄黒、羽青くひかる。小毒あり。夫婦和せざるものには、ひそかに喰はしむ」と出るので、此羽の和合の守りとなる事、記してありませぬ。民俗学に関する御著述なざる由にて、玉稿に私の知るところあれ



ば付せよとの御意、洵に光榮に存じますが、まだ／＼現在の私の力では駄目と思ひます。私は少なくとも尚七年間は此の地方の Back Bone となるべき書籍に一通り目をさらさないとお役に立つ事は出来まいと、今は勉強最中なのです。官吏や教員の如くに休暇や時間の多いものは、読書時間も多からうが、サラリーマンは境遇が許さぬから、却々はか／＼しく進歩致しません。あまり永くなりますから、本日は是にて失礼致します。

南方先生 侍史

省三 頓首

桂川氏が「九州路即興」とて寄越せし文に、鶴戸神宮に行つて失望したとて、「やむなくば飴でもしやぶれ鶴戸参り」とよんでゐますが、句の良否は私には分りませぬが、何故失望したか、私には不可解です。此の鶴戸参りには、色々面白い話があるのです。桂川氏は風景に失望したといふ意義か、土俗研究者眼を尊んで耳をいやしんではならないと思ひます。此辺の事は他日お知らせ致します。

南一四 (三月二十一日付封書)

大正十三年三月廿一日午後三時

宮武省三様

南方熊楠

拝復 十八日付芳翰只今拝見。貴書毎条小生予テ聞カヌ事多ク、大ニ心得ニ相成申候。

往復書簡集 (3)

(笠井純一)

『ノーツ・エンド・キールス』ハ千八百四十七年創刊、最初ノ編輯者ハトムストカ申ス人デ、此人ガ今日盛ンニ用ヒラレ居ル Folklore (俚俗学、実ハ俚伝学ノ方宜シ) トイフ英語ヲ創製シ申候。小生同様ノ独学者ナリシ。此雜誌ハ誠トニヨキ思ヒ付キニテ、一冊号ヲ、Notes (隨筆)・Queries (問ヒ)・Replies (答) ノ三段ニ分チ、Notes ニハ思ヒ付タ事ヲ記ス。(小生ノ「神足考」「ランダーリングジュー」(耶蘇刑死ノ片、嘲笑セシ猶太ノ履工ガ、其罰デ今ニ死ニ得ザルトイフ伝説。小生ハ之ヲ阿含經ニ見エタル寶頭ヒツツ盧尊者ノ伝も出シト見テ説ヲ立タル也。後チ二十年斗リン米人ガ今モランダリング・ジウヲ伊太利ノ民間デ、Butsaus トイフ、コレハ仏説ノ遺跡ナラント補ナヘリ)、「光ル鳥」「魚ガ神ニ參詣スル事」「ホキツチンダトント猫」(竜動市長猫一疋も大富ニナリシ話、柳田氏ノス、メデ小生自ラ訳シ「太陽」ヘ十三年前出シ候)、「松尾ノ仏法僧」「菟蕪問答」等何レモ小生ノNotes ニシテ、民俗学者間ニモテハヤサレ申候)。

Queries ニハ分ラヌ事ハ何ゴトモ問ヲ出ス。Replies ハ、読者中其間ヒノ答ヘヲ出スナリ(但シ工業・商業及科学的ノ事ハ出サズ)。タトエバ、中世欧州ノ諺ニ「貴人ト桜実ヲ食フ勿レ」トイフ諺アリ。小生ニハ一向分ラズ。因テ此雜誌ヘ問ヲ出セシニ、諸方有名ノ大家も答ヘ出申候。乃チ欧洲近世迄貴人ノ專擅甚シク、平民ヲ召ノ饗宴スル片、桜実ヲ食フテ其核ヲ一平民共ノシカツメラシクカシコマレル面ニ向ケテ弾ツツキ中ルヲ、少シモ恐ル色ナク辛抱セザル可ラズ。コレホト腹ノ立ツ事ナケレド、貴人ニ免ノ少シモ色ニ表ハサズニ居ラザルヘカラズ。万事此通り故、平民ガ貴族ノ宴ニ參ルナトイフ諺ノ由、答エテ分リ申候。又「吾輩今ハ一ツノ舟ニ乗合セタリ」トイ

フ古諺ノ一番古ク物ニ見エタルハ如何ト、彼方ノ人ノ問ニ対シ、小生ハ『孔叢子』ナドモ「異越同舟」ノ諺ヲ引テ、支那ガ一番古キ由答エ申候。加様ニノ学者ニハ欠ク可ラザルモノ故、サツカレノ小説ナドニモ男女ノ通人輩ガ宴談スル片、ナニカ解シニクイ事ヲ言出タルニ、若い女ガ「ソレハ『ノーツ・エンド・キーン』ニ出シテ問フノ他ナシ」トイフ所三条ホドアリシ事ニ候。カクテ米國始メ諸國ニ『ノーツ・エンド・キーン』ニ似タモノ夥シク出デ、今モツ、キ居ルモアリ。前年和蘭國アーンヘム市ニテモ出版、東京ノ和蘭國公使館一等書記官モタノマレ、小生モ一文ヲ出シ候ガ、ソレハ久シクツバカズ廃刊致セシ(其ノ時創刊祝ヒニ世界中ノ民俗伝説学者ヲ指名ノ、小生エ編輯者モ頼ミニ応ジ、小生投ゼシ女陰ニ羊ヲ画キシ話ノ *Offprint* 別刊座右ニアル故一葉同封致シ候)。其後、支那ノ清朝ニ成シ小説共モ二三条類似ノ話ヲ見出セシモ、ソレハ出サズニ了リ申候。右『ノーツ・エンド・キーン』ハ大正二三年頃迄ハ持主ガサー・チャールズ・ザルクニテ大ニ繁昌致候。此人ハ御存知如ク大政治家ニテ、海軍ノ事ニ通ゼル事英國無比ト称セラレシガ、遺憾ナ事ニハ誰カ友人ノ妻君ニ名ガ立チ、裁判ハ中止サレシガ、ソレモ物堅イ國風トテ誰モツキ合フモノナク、政治ニ戻リエズ死人同前ニナリ、タゞ此雜誌ヲ出スヲ樂シミニノ一生ヲ終ラレタリ。丁度此人ガ持主タリシ片、小生特別寄書家トナリ今ニ至リ申候。然ルニ近來英國モ大ニ大戦争ノ為メ經濟ガ狂ヒ出シ、出版費用思ハシカラズ。遂ニ七年斗リ前モタイムス新聞社ニテ出版トナリシガ、コレ亦思ハシカラズ投出サレ、今ハ田舎ニテ安ク出版シ、ロンドンニ編輯局ヲ置キ(他ノ新聞社内ニテ)ツツケ居レ片、時世ガ悪クナルト兎角諒

者ガヘリ行き、随筆ト問ヒハ多ク出ルモ答文ガ出デ申サズ。為メニ紙數ヲ減ジ、今年モハ又一号毎ニ掲載事項ノ目錄スラ出サヌヤウニ相成申候。而シテ前日申上シ通り、終ニ旧刊分ヲ置ク場処ノ倉敷料ニサシツカエ、今度一年以内ノ分ヲ除キ悉ク *demolish* (反古トシテ売リチラス事) トナリ申候。ソレニハ期日モアリテ、モシ小生望ミナラバ *demolish* セヌ前ニ通知ノ自分ノ出セシ分ダケ在來ノ安価ニテ幾部デモ保留スルヲ得シ筈ナレ片(一冊六片)、小生ニ只今ソナ余裕ナク、遺憾乍ラ廃棄ニ任セ候。實ニ遺憾至極ノ事ニ御座候。

柳田国男・高木敏雄二氏『郷土研究』ヲ出セシ片、小生ノ勸メニヨリ問答欄ヲ設ケシハ、右『ノーツ・エンド・キーン』ニ擬セシナリ。ソレモ今ニ諸雜誌ニ此類ノ欄多クナリヌ。尤モズツト以前ニ、明治二十五年頃ニ『東京日々新聞』ニ「何デモ来イ」トイフ問答欄アリシ事アリ。ソレハ『ノーツ・エンド・キーン』ニ真似タルニ非ズ。何デモコイ子トイフ人ガ博学自慢デ出セテナレ片、永ク続カズ一年内ニ止メ申候。小生ハ本山桂川氏ナト如キ熱心家ガ、答弁二十分ナル敏腕家ヲ十人モ憑ミオキ、此『ノーツ・エンド・キーン』流ノモノヲ出シタラ大ニ向ク事ト存候。一昨年東上中、博文館編輯部ノ人々ニス、メシ事アリシモ、今ノ館主ガ殊ノ外近イ慾多キ人ニテ、トテモ談シニナラザリシ。『太陽』ナドモ震災後、俗向キノモノトナシ了リ、為ニ主筆淺田江村氏等二三人引キ去リ申候。余波ハ、小生ガ例年書キ居ル子ノ年ノ風ノ話ハ原稿成リナガラ出版拒絶ニアヒ、小生モ大ニ損ヲ致申候。右ノ話ハ御序ニ本山氏へ御伝エ被レ下度候。

「メカジヤ」ハ前地質紀アルモノニテ、今ニアンマリ変リ居ラ

ズ。モト東京大学教授タリシモールス氏婦國ノ節、ロッキーマン山ヲ汽車テ走ル内、日本テ六ヶ月トカ前ニ買タルタバコヲノマント取出セシニ、其内ニ曾テ有明灣テ拾ヒシメクハジヤガナホ活テ蠢動シ居リ、カク生活力ノ強イモノ故、天変ニアフモ死ニ絶ザルモノト分リ候由、動物学上非常ニ珍シキモノニ御座候。

魚ノ眼毒アル由ハ、今度キ、始メナリ。小生ハ何ノ魚ヲモ食フニ際シ、第一ニ其眼ヲ食ヒ申候。幼少ノ時ハ左様致セド少シモ毒ニ中リシ事ヲ覚エズ候。

宇佐ノ馬蹄跡ノ事ハ、『統群書類從』ノ『宇佐縁起』トカ申スモノニ出居候ト記憶ス。足跡石ハ日本ニモ甚多ク、「神足考」ニハホンノ当時小生在英中手当り次第ノモノヲ書タル斗リニ候。

『教育画報』ハ小生一昨年東京淹留中、其編輯社長岸田幹夫トカイフ人來リ、二冊ホド製本ノ美冊ヲクレ申候。其内ニウッキウノ条モアリ。此人ハ小生ニ粘菌ノ事ヲ写真入りテ出ス様頼ミニ來リシ也。因テ小生ハ寄付金ヲ頼ミニ一文モクレズ(当時小生ノ肖像ヲ写サセクレト申シ來リシ北沢樂天ナドアマリ富マヌ人乍ラ十円クレ申候。其数日ニ英皇太子ノ御前デ其肖像ヲ即成ノ御覽ニ入レタホドノ名人デ、イハハコチラカラ十円出サネバナラヌ所ヲ十円クレ申候。ソレホドナルニ苟クモ画報ヲ出ス社長ニ一文モクレズ、江戸ツツナド、ハ昔シノ事、只今ウツカリ東京人ヲ相手ニスルトトシテ事ニアヒ申候)。其跡ハ友人田中茂穂氏(東京大学助教)來リ聞シニ、ナニカ魚ノ事ヲカキ画迄書テヤリシニ其号ヲ一冊クレシノミデ、一文モクレナシトノ事、先ハコンナ世間ニ御座候。

此ウッキウノ血ハ碧色ナル由、支那ノ書ニ屢々見エル。此物ノ学

術ノ研究ノ權威タル渡瀨博士來訪サレシ片聞シニ、イカニモ碧色ナル由。小生多年專攻スル碧藻類(肥後ノ水前寺ノリ等)ニハ細胞内ノ汁ガミナ碧色ナリ。ナニカ關係アル事ニヤ、一応精研シ見タシト存ジ居リ候。

吾國ニテ、他人ノ物ヲ吾ガ物ニスル風ノ夥シキニハ、飽キ果テ申候。英國ナドモ昔シハ此事盛ンデ、ヂスレーリノ *Curiosities of Literature* ナドニモ此事ヲ論ジアリ。先ハウマク盗ムベシトイフ様ナ論也(実ハ此人モ *Pillager* 小盗人 タリシナリ)。近代ニ及ビ此風大ニ改マリシガ、英國財政乏シクナリテモ、昨今又々此風大ニ起リ申候(リーガ、ボツカツシオノ『デカメロン』ノ諸話ノ出処ヲ研究ノ出セシ片、小生ノ力ヲ仮リシ条若干アリ。ソノ内小生ハ聞シ旨記セヌ処多シ)。米國ナドハ以前ハ外国人ノ書タモノヲ丸取り大ハヤリナリシガ、近來ハオヒヒソソナ事ガ少クナリ申候。衣食足テ礼節ヲ知り倉庫充チテ仁義アリトハ千古ノ名言ト存申候。貴下ノ毎度投書スル『民族ト歴史』ニ出ス何トカ博士ナドハ此ノ剽竊ノ親玉ニテ、其ノ毎々ノ説ハ柳田氏ノ説ノ丸トリニ御座候。実ニ耻トイフ事ナキ世ノ中ト存申候(前日モ『梅花無尽蔵』ヲ引テ寺ノ和尚ノ妻ヲ大黒トイフ事永正年間既ニアリシ由、発見ラシク大毎紙ニ出シアリシガ、コレハ高田早苗氏ノ祖父与清大人ノ『松尾筆記』ノ頭書ニ已ニ出居リ申候)。ソレモソノ筈、此人ノ妻ハ鍋島侯ノ侍女タリシヲ、殿様ノ子トカ孕ミ幾分ノブレミウム付キテ下サレタルモノナルガ、麴町ノ呉服屋デ万引キヲ働ラキ発覚シタルヲ、例ノ月経不順故知ラズニ盗ンダトカイフ弁解テ無罪ニナリ候由、『日本及日本人』ニ出居リシ。ソソナモノヲ平氣デ妻ニシ居ニホド故、博士外号、盗人内職兼本職

トデモ申スベキカ。

小生前年倫敦大学総長ヂキンス男ノ頼ミニヨリ、色々其翻訳ヲ助ケ牛津板ノ『日本古文篇』(大冊二巻、『万葉集』『竹取物語』『俳諧集』等ヲ網羅ス)ノ序ニモ、サトウ、チャンバレーン、アストン、アルコック、南方五人ノカヲ借ル事多シト明記シアリ。又昔シ東京ニアリシ宣教師ガ一寸出セシ『方丈記』ノ訳文不正ノ事多キモ、小生トヂキンス二人デ『方丈記』ノ訳文ヲ『皇立アジア協会雑誌』ニ出シ申候。ソノ片小生抗議ノ、従来日本人ト外人ノ共編物ハ、ミナ外人ノ名ヲ前ニ出スハ不都合ナリ。日本ノ物ヲ出ス礼儀上モスルモ、日本人ノ名ヲ前ニ出スヘシトテ、南方及ヂキンス男訳トノ出サセ申候。然ルヲ小生帰国後、グラスゴーニ袖珍世界名著文庫ノ一トノ右『方丈記』ヲ出スニ及ビ、小生ノ名ヲ削リ単ニヂキンス訳トノ出シ申サレ候。ソレハ無論小生ノモノトスルモ、英国ニ名高キヂキンスノモノトスル方、人受ケ宜シキトイフ本屋ノ差図ヲ出シ事ナルベキモ、不都合ナルハ邦人迄モ小生ガ『方丈記』ヲ出セシヲ疑フモアリ。三河ノ国ニ『方丈記』ニ関スル内外ノモノヲ一切多年集ル人アリテ、其真否ヲ聞キニマイリ候。因テ小生ハ『皇立亜細亜協会雑誌』ハ東京ニ多ク来リアルモノ故、一九〇五年四月号ニ就テ其ノ二三七一―二六四頁 Kunagusu Minakata, A Japanese Theureau of the Twelfth Century D. F. V. Dickins, C. By ヲ見ルベシ。袖珍世界文庫ノ分ハグラスガウノ……商會ト名ヲサシテ注文セバ、六片カ一志ノ安値デクレルト申シ答ヘタリ。然ルニ又数年後、『日本及日本人』ニ夏目漱石ガ『方丈記』ノ訳ヲ皇立亜細亜協会ノ雑誌ヘ出し、大名ヲ博セリト出アル故、小生大毎社ノ知人ニ聞合セシニ、漱石ハ『方

丈記』ヲ英訳ハシタレド、世ニ出サズニ私刊ノ知人ニ配リシ迄ナリ、其本入用ナラバ見スベシト話サレシ。ソナ事ニテ黙ツテ居ルモツマラズト存じ、小生皇立アジアヤチツク會デ出版セシ會号ヲ携ヘ上京シ、『日本及日本人』ノ三田村鳶魚來訪ノ際、親ク見セテ正誤サセ申セシ。イカニ言フヤ千人ノ世トハ申セ、加様ノ虚偽ノミ行ハル、ニハ驚キ入り申候。

トキハ古埃及テ神トシ拜セシ Isis ノ一種ナリ。但し日本ノハ大分チガフ。全身桃色ノ如ク美ナル先ハ驚ニ似タモノナリ。此物昔シハ上方迄モ来リシニヤ。『古今著聞集』ナドヲ見ルト京都辺ニモ来リシ様ニ候。トフトカキアリ。小生コレハ鶴ノ事ヲ印刷ノ誤刊カト思ヒ居シガ色々シラベルト、トキノ事ヲトフトモ申ス由。

小生ハ以前金錢豊カナリシ片ハ鎖石ヲモ多ク集メ今ニモチ居リ、澎湖ノ文石ハ見シ事ナシ、コレハ小生研究所確立ノ上御贈リ被レ下度候。只今ハ置キ所ナシ。カヤウノ物ラムヤミニ塵裏ニオクハ至極遺憾ニテ何トカ整理ノ置クニ非レバ何ノ益ナシ。

鴛鴦ノ肉夫婦ヲ和セシムトハ『本草綱目』ニ見エタル文ニ御座候。『訓蒙図彙』ハ色々アルガ、生物ノ部ハ多クハ『本草綱目』ノ直訳ニ御座候。コレハ今も思ヘバ何デモナキ書ナガラ、当時中村煬齋ガ之ヲ編セシ片ハ、余程苦心サレシモノト存候。ケムベルノ『日本篇』ノ動植物ノ図ハ、全ク『訓蒙図彙』ヲウツセシモノニテ、其中ニ動植物ノ名ヲ挙タルハ、多ク此書ヲ襲用セシナリ。漢音ト和訓ヲゴツチャニトリシ故、臬ヲケウ又フクロ、鶏ヲケイ又ニハトリナド、何レモ両ツナガラ日本名トノ伝ヘタル事多ク、之ヲ基トシ日本ノケイハ何種アルカナド洋人ニ問レテマゴツク事多ク候。煬齋ハ温厚ノ

君子儒ニテ貝原先生ト並稱サレタル大家ナリ。近時ノ贈位ノ頻繁ナルニハ飽果タガ、コンナ人ニ何ノ沙汰モナキハ不釣合ヒナ事ナリ。思ヒ羽ヲ鏡底ニ入ル、事必ズ昔シノ俳句集ニアルベシト思フ。出口米吉氏ニ問合セ中ナリ。

民俗学ノ書物ト申スモノ今迄ノ所西洋ニモ満足ナ物ナシ。日本ニ至テハ其書ナキノミナラズ宜シキ材料ヲ集メタモノモ無ク、從來在ル所ノ材料ハ多クノ書ニ散見スル斗リニテ、タマ／＼必要ノモノアルハ猥鄙ニ渉ル故、畧ノ記サズ、又採ルニ足ラヌ俗書トメ全ク採ラズ候。天明頃備中ノ古河辰ノ『東西遊雜記』ノ如ク、随分辛苦ノ東西諸国ヲ巡リシ日記デ、色々珍シキ事ニアフタ様子ナルモ、例ノ如ク笑フニ堪タル俗伝トイフヤウナ一言ヲ以テ排シ去リ凡テ筆シ居ラズ、遺憾ナ事ニ候。

小生ハ顕微鏡三ツモチ居リ、近日和歌山ニ集金ニ上ルニ付キ、集金ノヒマ／＼ニタゞ遊ビ居ニモツマラズ、同地付近ノ淡水藻ヲ写生シテ出板ノ材料トセント存候ガ、所持ノ写生機(カメラ・ルシダ)ガ二ツノ顕微鏡ニ合フガ一ツニハ合ハズ、修繕ニヤランニモ三四ヶ月モカ、リテ外国工送ラザル可ラザル故、恐縮ノ多年見合セ居シニ、幸ヒニ独逸ノ技手テ東京デ之ヲ直シクル人アルヲ見出シ、其顕微鏡筒トカメラ・ルシダヲ送リ了リ、只今其ノ修繕ヲマチ居リ、徒ラニ手ヲ空クスルモツマラヌ故、『アラビヤンナイツ』ノ索引ヲ作り居リ、前年『一切経』通覽以後ノ大事業ナルモ幸ヒニ明夜アタリ完成ノ筈ナリ。是も又其方ニトリカ、ルニ付キ、本状ハ是ニテ擱筆致候。ソロモン裁判ノ事ハ六年前出板ノフーザー男ノ『旧約全書俚伝篇』ニモ出居リ、ソレニハ勝教(仏經ニイヘル裸身外道)ノ經典も専ラ

類話ヲ引キ居リ候。和漢ノ故事ハ一向洋人ハ知ラヌラシ。小生和歌山ニ歸リ研究所幸ニ確立シ得バ、一文ヲ英國で出サント存居候。

御状ハ田辺町ノ拙宅宛テ出シ被レ下候ハ、和歌山へハ四時間デ達スル故、直チニ転送可レ致候(此間ガ甚シキ航路デ毎度乗客ガ目ヲ舞ハセヘドヲ吐ク。時トノ難破スル事モアリ)。然シナガラ郵便位イハ恙ナク着キ申候。

カハラケト申シ、婦女ノアルベキ所ニ毛ノナキモノアリ。先年大正七年ノ『太陽』ニ此事ヲ、小生滑稽雜リニ書キ、警視庁も『太陽』主筆鈴木徳太郎氏召還サレ、大眼玉ヲ食ヒシ。然シ此事ハ大神宮ノ神歌ニモアル事故、ソノマ、ニナリ申候。其歌ハ只今記憶セザルモ件ノ『太陽』ニ載セタリ。所ロガ一昨年東京ノ旅館へ折口信夫君來訪(大阪ノ人ニテ、少時木カラ落タカ何カデ、キンダママヲ二ツ共全ク潰シ、天成ノ闖者ナリ)其前ノ年小田原ニ遊ビシニ、右ノ神魚ヲトル茂、伊勢神宮付キノ漁人ガ歌ヒシトイフ者ト似タ唄ヲ唄フテ漁夫共ガ宴シ居シ由。其唄ハ「下田ノ沖ノ毛無シ島、カハラボッスリヤ七日ノ穢レ、七日所ロカ一所ノ汚レ」前後ハシカト聞カザリシ由。(『伊勢参宮名所図会』ニ「アハラキ島俗ニ飛島ト云フ。……又神崎ノ向ヒニ小島七有リ。之ヲアハラケトイフ。其所ニ草木ノ生ヌ岩アリ。之ハ毛無シトイフ。贊海神船子ノ歌ニ、「アハラキヤ、島ハ七島ト申セドモ、毛無シカテ、ハ八島ナリケリ」。カテ、ハ加エテノ意ト見エ申候)。ドウモ此アハラケカハラケトイフ語ガ出し事ト察し申候。アハラケハ疎毛デ、毛無シニ対ノ草木ノ生エタル義ト存候。小生或ル故老ニ聞シニ、カハラケトハ彼処ニ三四毛マバラニ生エタルイフ。是レヲ嫁ニトルト其家ノ前後左右ノ家ノ田畑ガ悉ク不毛

荒廢ストテ甚ダ忌ム。毛ノ全ク無キヲ饅頭トイフ。是レハ凶ニ非ズト(当国西牟婁郡大内川村ノ人ノ話シ)。右下田ノモノ、唄ヲ参考シ、又伊勢ノ伝ヲ攷合スニ、カハラケトハ全ク毛ナキニ非ズ、粗タトマバラニ毛少キヲ申セシト存候。乃チ毛ノ麁少ナル女陰ハ大凶ニテ田畑農作又漁事ニモ之ヲ甚シクイミ、漁師ソシナモノニ当ルハ七日齋戒シ、又其男一人ニ止マラズ、其全部落ノ汚レト心得、不漁ノ兆トセシト存候(古羅馬ノ女郎ハ皮ノムケタル男陰(主トシテ猶太人)ヲ客ニトリタル片ハ七日商売ヲ止メ、閉籠リテ齋戒セシ由明記アリ)。貴地方ニモ加様ノモノヲ忌ミ候事ニヤ。回教徒又回教徒ナラヌ南洋島人ナドハ、陰処ノ毛ヲ全クヌク事多シ。コレハ猶太人十四徒ガ生レテ七日頃必ズ男陰ヲムク(女陰ハサネヲ切ル)ト同ジク、汚穢ナル龜頭炎様ノ病ヲ禦グ為ニ御座候。 再白

## 南一五 (三月二十三日付封書)

大正十三年三月二十三日早朝四時

宮武省三様

再拜  
南方熊楠

拝啓 先日三度迄御寄付金送り被レ下シガ、小生ニ取テハ福兆ナリシニヤ。大坂ノ支那料理主人福田ト申ス人、小生纔ニ年来蓄ヘタル筆耕料ヲ、一昨年上京中寄付金ノ事ヲ殊ノ外世話クレタル人々ガ震災ニテ途方ニクレタル上ニ、知ル知ラヌ人十四家族避難シ来リ、何トモ詮方ナキ由ヲ聞及ヒ、拙妻ト相談一決ノ悉ク援助トノ出シタル

ヲ、『日本及日本人』ヲ讀ミ大ニ感心シクレ(此人ノ友人服部トイフ人、横浜ニテ焼死致シ、其人ハ禅僧ニテ、鉄眼ガ一錢ヅ、集メテ『大藏經』ヲ出版セントスル内二度迄火事ニアヒ、飢饉ニコマル人ヲ救恤ニナゲ出セシモ遂ニ成功セシ事ヲ欽慕シ、先年鉄眼伝ヲ私費出版シタル由ニテ、丁度小生ノ事ガソレニ似タリト甚シク感心サレ候由) 一円又ハ五十錢ヅ、集メテ三回送ラレ申候外ニ、或ル会社ノ營業上、年々莫大ノ損亡アル事ヲ小生エ告ケ来リ候ニ付キ、其害菌ヲ防グ方法ヲ示シ、是又百円一度ニオクリ来リ、其他ニモ五百円六円トオクリ来リシ人五六人有レ之。又米国在留未知ノ人モ一二円送リ来リ、小生大ニ有卦ニ入り、昨日午後大雷中ニ嘯吟シ居リ候処へ電信来着、小生唯一人アル兄ガ六十五才デ死亡ノ報ニ接シ申候。洵トニ禍福ハ糾ナヘル繩ノ如シトカ、一波低フノ一瀾起ルハ免カレヌ世ノ中ト又々沈吟、トウ／＼夜来眠ラズ、詮方ナキマ、ニ此状認メ申候。 希臘ノ古諺ニイビクスノ鶴ト申ス事有リ。是レハイブクスト申ス詩人が故郷へ歸ルトテコリント辺ノ砂漠ヲ通ル内、賊隊ニ襲ハレ殺サル。其片空ヲ飛ビ居ル鶴ヲ見テ、吾ガ仇ヲ討テクレト云テ死セシ。直後ニ、コリントノ民ガ堂庁ニ集會シ、彼ノ詩人ヲ殺シタ賊モ其内ニアリシニ、其上ヲ鶴ガ飛ビ廻ルヲ見テ、賊ノ一人ガ何ニ心無ク「イブクスノ仇討チガヤツテ来タ」ト叫ンダノデ、ヘンナ事ヲイフト一同立カ、リ、詰問シテ白状ニ及ビ、賊徒一人モ残ラズ殺サレタトイフ。此事ヲ英國ノ詩ニモ詠タルモノアリ。小生此頃「千一夜譚」ノ索引ヲ作ルベク、全篇通覽中、アラビヤニモ此話シアルヲ知レリ。ソハ一旅客ヲ一賊ガ捉ヘテ財ヲトラントスルヲ、四分ノ一ヤルヘシ、半分ヤルヘシトイヘド聞入レズ、是非ニト云テ悉ク取り、剩ヘ其旅

客ヲ殺ス。其片偶タマ頭上ニ飛居ルフランコリン（日本ノ雷鳥如キモノ）ヲ指サシ、「汝ハ今吾ガコ、テ無残ナ目ニアヒ死スルヲ立証シ訴ヘクレ、上帝ハ必ズ此賊ヲ恕セジ」ト云テ殺サル。其後チ、其賊官ニ降り、將軍ニ優待サレ久シク無事ナリシガ、或ル日將軍フランコリンヲ殺シ、其肉テ此賊ヲ饗スルト、其賊大ニ笑フ。「何タル無礼ゾ」ト咎ムルト、「吾レハ將軍ヲ笑フニ非ズ。若キ片一旅客ヲ殺シ財ヲ奪ヒシ事アリ。當時其者死ニ際シ、フランコリン鳥ヲ指シ此事ヲ立証シ訴ヘクレト云シガ、今ニ至リ訴ヘモセズニ、今又此鳥ヲ食フハオカシイ」ト云フ。將軍、ソレハ聞捨テナラヌ事ト、忽チ刀ヲ拔テ賊ヲ殺シタ片、饗膳ニ上リ居リシ死ダフランコリンガ偈ヲ説ク。殺されたと思はゞそこなはじと思はゞそこなふ勿れ。唯だ善ク惟れ罰めなば、上帝も幸運を与へん。運は天にありといふもの、善行こそ運の根元たりと知心得たい事だ、と。

希臘ニハ殺サレタ直後、アラビヤニハ殺サレテ久シイ後ニ、何レモ鳥ガ罪ガ露ハレシトアリ。扱支那ニモアラビヤ人ガキ、デモシタモノカ、『琅邪代醉編』ニ似タ話シアルガ、一層ウマク面白ク作リアリ。淮陰ノ節婦、其夫ト里人ト同行ノ商フ。里人其妻ノ美ヲ悦コビ、江ヲ行ク間ニ乗メ、其夫ヲ水ニツキ突シ殺シ、「水ニ溺レテ死セリ」トテ、ワザト人ヲヨビ屍ヲ求メ得テ、大ニ慟哭シ、其荷物ヲモチ帰リテ死人ノ母ニ渡シ、死ダ者ト兄弟同然ナレバトテ、死人ノ母ニ孝養スル事己レガ親ノ如シ。死人ノ母感心シ、死人ノ妻ヲ之ニ嫁シ、子迄生ム。然ルニ一日、後夫ガ庭ニ積ツタ雨ノ水ヲ見テ竊カニ笑フ。妻怪ンテ故ヲ問フト、多年中モヨクナリ、子迄アレバ氣遣ヒナシト安心シ、実ハ以前、吾レ汝ノ艶色ニホレ、何トカ手ニ入ント思フ余

往復書簡集 (3)

(笠井純一)

リ、汝ノ夫ヲ水ニツキ落シ殺シタ時ニ、汝ノ夫水泡ヲ指シ証トシタ（コレハ前ノ二例ト同ジク水泡ガ証拠ニ立チ、今吾レヲツキ落シ殺スモノヲ訴ヘクレト云シナリ）。今眼前ニ雨フリ水泡立チ居ルガ何ノ事モナシト云シニ、婦黙然タリ。ソレモ後夫ガ外出スルヲ伺ヒ官ニ奔リ告ゲテ其獄ヲ正シ、後夫ハ刑死サル。因テ慟哭シ、「吾ガ色ヲ以テ二夫ヲ殺セリ。亦何ヲ以テ生ン」ト云テ淮水ニ赴キ投身ノ死ダト。或説ニハ後夫ノ子ヲモ縛ツテ水ニナゲコミ、扱自分モ死ダト。大抵コンナ話シハ古来殊ニ京伝・馬琴ナドガ翻案ノ小説ニ作リアルガ、小生ハコンナ話（乃チ死ヌ片ソバニ在タモノヲサシテ仇ヲウチクレト云シニ、後チニ其ノ物ガ何トナク証拠トナリテ殺人犯ノ者ガアラハレル）ガ吾邦ニ一ツモナキ様ニ存ジ申候。貴下モシ一ツデモ御存知ナラ教ヘ被レ下度候。小生ハ貴下モ教ヘラレシ旨ヲ明記シ英国デ出サント存申候。

髪ノ毛ノ縮レタルハ助兵エノ相也ト此辺デ申ス。八文字屋本ノ何トカニ坊主ガ金多ク持テ遊君ヲ根引スル所ニタゞゞ彼ノ事ニ昼夜倦マヌベキ美女ヲ求ル。世話スルモノ、高橋太夫コソ髪縮レ、足ノ大指反タリト云フ事アリ。足ノ大指ノ反タルモ房事ヲ好ム女ノ相トイフ処口、只今アリ候ヤ。

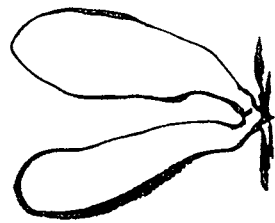


郎君子トイフモノアリ\*。此辺デイソモノ、大坂辺デガンカラトイフ小螺ノ際ナリ\*\*。英国デ Eye Stone ナド申ス。丁度表面ガ\*\*白キ眼玉ノ様ナレバナリ。之ヲ酢ニ入ル、ト炭酸瓦斯ヲ遊離シ

(ヘタハ炭酸石灰、ソレニ酸ガ加ハルト醋酸石灰トナリ炭酸ハ分離  
ノ) 小沫(ト)ナリ、ヘタノ下ニタマリモチ上ル故ヘタガ揺リ、皿  
底ナド少ル傾斜セシ表面ニ置キ醋ヲカクレバコンナ\*\*\*風ニ動  
ク。二ツオケバ相近ク状ノ如シ。是ニ付テナニカ貴方ニ伝説有レ之候  
ヤ。小生多年此事ヲ書タル「燕石考」トイフモノアリ。十三国ノ語  
テ書キタル故、印刷六カシク今ニ出版出来ズ(翻訳センニモ、アル  
メニア語ナド今忘レテシマヒ、字書ナキ故自分テ読ミ得ズ。此アル  
メニア語ハ古ヘノ語ト今ノ語ガ全然異ナルモノナリ)。

一六鵜氏も曾テ聞シハ、宇佐八幡ニハ多ク飴ヲ売ル店アリ。昔シ神  
后、応神帝ヲ生ミ、社内ノ樟ノ空洞ニカクシテ出征サレシニ、蜷貝  
ガ飴ヲ以テ天皇ヲ育テシ故事有テノ故ナリ。今モ其空洞幹中ニ二ナ  
多クアルトイフヲ見ルニキセル貝ナリト申サレシ。随分ヘンナ事ナ  
リ。小生カ、ル類ノ話シヲ此他ニキ、シ事ナシ。是レハ貴下モ御聞  
及ビニ候ヤ。

右ノ六鵜氏(豊前国宇佐郡流長洲町住)ハ、古希臘ノ神像ニ見ル  
如キ美麗ナ人ニ候。健脚テ東京モ発途ノ歩ミ、富士山ニ上リ翌日帰  
ル由。小生一昨夏日光ニ同行、七日斗リ遊ベリ。危険ナ滝ノ上、又  
高山ニ上ルヲ何トモ思ハズ。夥シク小生ノ為ニ珍品ヲ見出シクレタ  
リ(コレハ追ヒク發表スベシ)。ヘンニングシアトテ、アフリカノ  
マダガスカルト印度諸島ニ各唯一種ノミナル奇属ノ菌ヲ発見セリ。  
ソレハ日光湯本モ上州沼田ヘ越ル無人ノ所ニテ、夏モナホ身毛立ツ  
ホドノ寒キ野ノ中ノ溝ニ渡レル樹幹ニアリシ由。此属ノ菌從來知レ  
居リシモノハ、二種共上図ノ如ク二個ノ蓋ガ上下ニナラフ。根本ハ  
一ナリ。然ルニ六鵜ガ見出セシハ、下図ノ如ク一根モ二蓋ヲ生ジ、



其二ツノ蓋方違ヒチガヒニ舞ヒ重ナリ居リ候。先ハ巴ノ紋ノ如シ。  
且ツ全体黄金色ニテ光リ、希有ノ美物ナリ。此人亦粘菌ノ新属ヲ発  
見ス。粘菌ニハ新属至テ少ナキモノナリ。小生当時ノ快遊記念ノ為  
メ Rokkuna トイフ新属名ヲ立テオキ候。去年秋、東京ノ殿下ニ御  
覧ニ入ルベク用意セシガ、丁度其ノ記載等全ク成シ日、大震災ノ報  
ニ接シ、大ニ失望中止セリ。

アラビアノ文章ニハ細腰大尻ヲ美人ノ兆トス。西班牙ナドモ左様  
ナリ。貴地方デハ此事鑑識イカニ候ヤ。

小生幸イヒニ和歌山ノ集金事成リ候ハバ、今夏小畔四郎・平沼大  
三郎・六鵜保・末広一雄等集金ニ骨折リクレシ人々、南方党員トモ  
イフベキ連中ヲ六七人招集シ、飲食等ハ至テ始末シテ、写真方、採  
集方、運搬方ヲ定メ熊野巡廻致スベシ。或ハ高野ニ上リ可レ申、(高  
野ハ知人多ク前谷管長年来ノ知人ニテ特ニ色々ノ事ニ便宜多シ) 其  
節ハ貴下モ何卒御一遊被レ下度候。小生ハ極メテ貧素ナレバ邸ハ随



分広く、当町第一ノ閑静ナ住居ニ有レ之、又藏スル所ノ書籍珍物甚ダ多シ。熊野ノ奇勝ハ今ノ内ニテ、ヤガテ六七年中ニ汽車ガカ、レバ万事俗化シ了リ、見ルニ足ルモノナキニ至ルベシ。モハヤ晩トナリ候テ眠タク候付摺筆仕リ候。

敬具



カプトムシト申ス虫アリ。イカメシキ体ノモノナリ。其雌ハ角ナシ。是ニ付キ何カ伝説有レ之候ヤ。『寛元日記』ト申スモノニ正雪誅セラレテ後チ(或ハ天草賊誅セラレテ後)、九州二甲青キタル体ノ異虫生ズトアルハ此事カト『日本及日本人』ニ申シ置タリ。又東上中、一友人ガ聞シハ、東京デハ小兒之ヲク、リテ杜寺ノ賽銭箱ニ入ル、ト大ニ怒リ、モガイテ箱内ノ銭ヲツカムヲ引上テ盗ミトル由。此ニ事ノ外ニ承ハリシ事ナシ。

青森県ノ中道等氏非常ニ小生ノ写真ヲ望マレ候。小生ハ写真ヲ人ニ見スルガキヲヒニテ遂ニ出セシ事ナシ。毎度新紙ニ乗ルハ出来宜シカラズ、乗タルヲ誰カ、拾ヒテ伝ヘシモノナリ。小生自分デ満足ト思フモノ此頃見出タリ。取ルニ足ラヌモノナガラ、小生弥々集金ニ出カケル前ニ一枚ハ貴下、一枚ハ中道等氏ニオクリ可ニ申上候。少ナキモノ故御入用ナクバ御返し被レ下度候。孫逸仙氏殊ノ外懇交有テ小生帰朝ノ節、和歌山迄尋ネ来ラレシ、其節一所ニトリタルモノアルモ、殊ノ外ノ大板ニテ運搬不便ニ候。

小畔四郎氏只今内国通運会社ノ専務取締ニテ、毎度諸國ヲカケマハル。モシ、貴地近クエ行カバ停車場デモ一面会スル様申シオキ候。此人ハ粘菌ヲ集ル事熱心ニテ、既ニ二十三種本邦デ創見サレ申候。六鶴氏ヘモ貴下ノ事申シ遣シ置候。モシ長洲町辺ヘ御出之節ハ、

御一訪被レ下度候。何レモ小生ノ寄付金ニ殊ノ外骨折リクレタル人ニテ、小畔氏ハ既ニ五千円ホド出シクレ申候。此人、越後長岡ノ藩士、有名ナル劍客ニテ鹿兒島乱ニ討死致サレ候。

森老岐守勝信其子大坂デ勇戦シ、秀頼公ノ介錯シテ自殺セシ豊前守勝永、此ニ氏ノ事今日ニ至テハ何ノ伝ハル事モ無レ之候ヤ。実ニ遺憾ナ事ニ候。『外史』ニモタシカ、勝永兵峰尤モ鋭ト有テ、大坂陣ニ関東方ノ大名ヲ三人迄殺シタルハ此人ニ御座候(外ニ大名ヲ殺セシモノハナシ)。小倉ノ城主タリシ也。又讃州ノ生駒家ノ事ナドモ一向伝ハラズ。其家ノ亡ビタルナドヤハリ豊臣家ニ関係アリシ事カト存申候。徳川ノ世ト成ラバ豊臣家ノ関係者諸家ノ事ヲ、何レモ特ニ悪クカク事ニ定リ居リ候様也。加藤忠広ノ如キモ英国人ノ日記ニ見エタル所口、決ノ後世伝フル如キ阿房ニ非シ事ト被レ察候。小生知遇ヲ受ル徳川頼倫侯ノ初祖頼宣卿ハ清正ノ髯タリシ也。

南一六(三月二十六日付葉書)

大正十三年三月廿六日夜七時

思ヒ羽ガイチヨウ葉ニ似ルトイフ事ハ、『本草啓蒙』卷四三ニモ出、防州方言イチヨウバトアリ。

拝啓 廿三日付ハガキ今夕拝見、『本草紀聞』トイフ書ハ誰ノ著デ何年出版、何冊アルモノニ候ヤ。白井博士ノ『増訂日本博物学年表』ニモ見エズ。兎ニ角ソレニ、思ヒ羽ハ銀杏ノ葉ニ似ルトアル事ト、貴友ガ加賀ヤ播磨ニテ、紀州同様此羽ヲ鏡底ニ入ル、事アルヲ知り

得タルハ幸ヒナリ。カ、ル事ヲ何時頃ハ始マレリナドイフハ、昔シノ学者ノ云ク事デ、何時始マツタカ書ク文字モ知ラヌ輩ガ始メタ事故、ソソナ事ハ知レルモノニ非ルモ、日本ニテ文書ニ見エタルハ何時代ノ何書ガ現存スル尤モ古キ記文トイフコトハ、必ズ分ルモノト存候。色々穿鑿スルガ今ニ見当ラズ候。古キ連歌、俳書ナド見レバ必ズアル事ト存申候。

当地方ニテ古ク春時、山吹ノ心ヲ図ノ如ク切り、其下ニ米糊モテ小螺ノ厩(スガヒ)ヲ着ケルト、山吹ノ心ハ立ち居ル。カ、ルモノヲ多ク作り、兎毎ニ一本ヲ出し、タ、ミノ上ニオキ、豊ヲ手デタ、ケバ山吹ノ心ガオドリアリキ、或ハ倒レ或ハ傾キ、或ハ立タママオドリ進ミ行クヲ戯レトセシ。山吹ノ心ハ色々色々染メル也。此戯ハ名アリシガ、今ハ知レルモノ無シ。貴下御存知ナラ御知セ被レ下度候。又大豆ニ色々ノ紋斑アリ、又白黒、緑黄或ハ黄黒相半バスル等色々アリ。煮タ所ガ尋常ノ大豆ニ大ニ味劣レリ。コレモ昔シハ三月三日ノ雛祭りニ色々ニ箱ニモリ、其雛前ニ献ニ裝飾美観トセシナリ。只今ハソソナ事ナキ故、折角コシラエ上シ是等ノ豆ハ絶エ果テ申候。四国其ノ他ニテ今モカク用ル所アリヤ。

早々敬具



宮一三 (三月二十六日付封書)

大正十三年三月廿六日

拝啓 二十一日付玉章並に英文 Man who Painted the Lamb upon his Wives Body 難有拝誦致しました。毎度御芳情御礼の申様無

之、家宝として永く保存仕ります。

扱て是に似た咄で、私の知るもの左に、

さる所に頗るはしまめの亭主あり。其の家内他出中、亭主の浮気せむことを気にし、亭主のエテモノに馬の絵をかいて外出す。後帰宅して、亭主に向ひ大丈夫かと訊く。亭主大丈夫なりと言ふにぞ、さらばお見せと其の陽根をうかがふに、成程馬の絵はあれど俺のかいた馬よりは肥えたり。よつて其事を詰ると、亭主の曰く「そりや馬じやもの、マメ食ふたら肥えるサ」。

淫乱な女房あり。その亭主、己が留守中家内の浮気せむ事を懼れ、陰部に鴛の絵をかいて外出す。後帰りてお嬢の玉門を検するに、成程鴛の絵は在れど、亭主の右方にかいたに對して、是は左方になり居れば、其謂れを詰ると家内の曰く「そりや鴛じやもの、谷わたりはする」と答へたとサ。

此の落語、種ねは外国のものなりしこと、始めて英文貴説にて承知し、大いに啓発せられました。

女中の出替りは、私の郷里では盆でした。今では女中勤きも、私等子供ときは、此季節がくると、衣類を風呂敷に包みて肩へ仕負ひて、村落より町に来るを屢々見かけました。そして雇はれても、三日只奉公と称し、三日以内双方いづれにてもよし、嫌なれば断りて差支なく、女中より申し出のときは、其の三日間の給料は貰へぬ習慣でした。

当地方(企救郡足立村)にても、矢張り盆が出代りですが、博多地方は多少異なるにや、『石城志』に「奴婢を求むるに、今日(二月二日)より来年二月二日までを以て期とす。但し士家は奴二日、婢廿

日也。又農家は十二月十三日を以て、男女ともに出代りとす。国俗是を鈍投ツツと云」とあります。久留米市外三藩郡住吉地方では「ナタナゲ」とは奉公人の敷入りを意味し、百姓などには「敷入り」など申しても通じません。山口県厚狭では毎年下女市が立ちます。雇主と直接給金等談判して取極めてよろしく、期日はしつかり覚えておませんが、五月頃であつたかと記憶してゐます（小生厚狭に行きし事あるも、下女市に未だ行く機会ありません）。

咄の筋は異なりますが、厚狭の下女市の事を思出すと、Traveler's tales 所載バジロニアの May Fair の事が、私には連想オモされます。守部の『俗語考』に「年季奉公などいふ年季も聞えてはあれど、もとは年功といふ詞の音語の方に転じたるにやあらん」。『砂石集』八「其家にとし切の奉公してありけるが、まだ年も経ざるうちに」とあり云々。女中に限らず、奉公人の生活を取調べたら、色々面白い材料が得らるる事と思ひます。大阪辺にては、昔は女中に目見メミのとき、雑巾をささしめて其の力を試めし、又「目見」のときは一旦家に帰らしめました。是は目見メミのときから直ぐ雇入れると、縁遠く長続きしないとの俗信があるからです。同じ奉公人でも料理店の板前の如きは、見習時代は「オヒマハシ」と称し、後「イタバ」となり、「イタバ」の頭を「シン」と称し、是が一番の出世で、「シン」と言へば、自らは余り手を下さず、精々刺身を切るか、汁の味加減を見る位、「私はどこそこの料理店のシンでした」と言ふ事は、彼等社会では自慢の履歴となるのです。そして、はたして彼等の腕があるや否を、雇入るときに試めすには、刺身の「ケン」をむかせるのです。即ち大根のケンのむきかたの巧拙如何によりて、技量は看破

せられ、大体是にて給金が値踏みせられるのです。女中奉公の咄が一寸脱線しましたけれど、刺身の「ケンムキ」の咄は面白いと思つて、御吹聴する次第です。

海月に就て思出す事は、大正九年十一月四日の『大阪朝日新聞』に「関門港外山口県豊浦郡蓋井島付近に、去月末小さきは豊半豊敷、大いのは豊二豊敷位の俗に鯛鮫海月と云ふ海月が數十匹群をなして漂流して来たので、同方面に出漁する下関及島島村の漁師約五百戸のものは、今年は豊年だと言つて、目下悦に入つてゐる。同大海月へやつて来たのは、大正二年に一回、今年と同様蓋井島付近に其の姿を現はしたと云ふ。之を眺めた多数の漁師連は、我れ先きにと、同海月の胴中に、蛤搔ハツリカきやうなものを打込み、其の一部分を取り、鯛釣りの餌にしてゐる、云々」。此の大海月は、今より十五年前、大連港碼頭に漂着するを、私は見た事があります。チヌ釣りに対するウンキウの餌と同じやうに、此の大海月が鯛の餌となるとの咄は、私には面白く感ぜられてゐます。

肥前佐賀郡では「生きとれば、海月の骨にも逢ふ」と曰ふ諺をよく申します。他国でも耳にする所でありまして、『鶉衣拾遺』中に「けふ爰へたづね来むとはくらばねや、くらげの骨にあふ心地する」とあります。なぜ又こういう事を言ひだしたものと、私は常に不審に思ふてゐます。私の郷里の船頭は、沖釣りに出かけるとき、よく灰を持って行くものがあります。是は釣糸をたくるとき、海月が糸にひきかかりて来て、ささるとき、此の灰をすりつけると痛みが去るからじやと申します。私等子供のとき、海水浴して海月にさされ

たるときは、互に小便をしかけて痛をとりました。

カハラケは近所七軒に崇ると言ふ所あるそうですが、当地方並に私の郷里では申しません。寧ろひやかしの好材として取扱はれます。私が子供のとき(私は此の三月にて四十三才なり。「龜の甲もお年の功」といふ俚諺あれど、徒に年喰ふのみにて何等能なく、常に之を恥としてゐます)高松の場末西浜町に「なかみせ」と曰ふうどん屋あり。この家内カハラケなりとて、当時流行の「チョンコ節」のつくり替歌に「なかみせのお婆ハン、カハラケボボさげて、夏の暑い日に涼しかる。チョンコ、コラ〜」といふのを遠慮もなく、若衆がうたつた事があります。是は上の文句を忘れしも、大阪にて「……カハラケボボさげて、夏のなが日に涼しからう」と唄ひしをまねたものです。大阪にて、よく唄れし俗謡の内に、

行かうか、戻らうか、住吉の四社の前なるソーレ橋(ソリ橋の訛)、のぼつて沖を眺むれば、七福神の樂遊び、中にも夷といふ人は、金と銀との釣竿で、黄金の竿で鯛釣て、鯛釣つたお蔭で嬢貰て、貰ふたお嬢がかはらけで、隣のお嬢もかはらけで、かはらけ同志が喧嘩して、どつちも怪我なきや、エージャナイカ〜、エール〜、エヤサツサ、ウンと持て来い。

と曰ふのがあります。なんと旨い事いふじやありませんか。女で俗に「ナベカツギ」とて頭髮の生え際は目立てききものは、大抵かはらけなりと言はれ、又男の方のかはらけは、「フウソク」と称されます(大阪地方)。女のかはらけは一名「お茶碗」とも言ひ、相場師は「すべる」とて大に忌みます(反対に、知らずに月経女に接するときにはアタルとて喜びます)。鹿児島地方にても「カハラケ」は茶碗と

称し、男の「カハラケ」に対しては別に異名を聞かざるも、是は「男の宝なり」と称して珍重します。咄は異ひますが、男の始めて性交するを「筆オロシ」と称して、是は遊女に大に持てる事となつてゐます(此風関西地方一般なり)。貴地方にては、毛なきを餓頭と称す由ですが、鹿児島地方では陰部を俗に餓頭と称し、「おかーさん、蛇が餓頭にはいつた」などいふ冗談ばなしもあります。大正五年天草牛深に行つた事ありますが、此の地方でも陰部を餓頭と称するを耳にしました(此の地方の女に就て研究したる事あるも、他日に譲ります)。

茲迄書きしたためまして更に玉章に接し、御身内に御不幸のありし事をお悼み申します。Death is not death, but hanshon と申しながら、矢張り死は悲しいものと思ひます。私は後継者なき故、かねて家人に自分死後は坊主をよばざる事、遺骨は火葬場に其俵放置する事、墓はもとよりたてざる事、法事は一切営まざる事、書籍は親類に好学の者あれば寄与差支えなきも、さもなき限りは、現住地の図書館若は学校に寄付の事を、常々遺言してありますが、坊主と遺骨との問題は、未だ家人が納得するに至りません。余談は扱て置き、今日は寝棺多くなり、遺骸の舟入りも容易ですが、普通の樽式棺に納むる事は、遺骸の硬くなりたる場合困難する事あります。此のとき私の郷里では金剛砂をふりかけると軟かになると、湯灌のとき金剛砂はなくてはならぬものとなつてゐます。貴地方に於ては、是等に関して何か咄は御座いませんか。家人の取調べによると、大和の当麻寺五月十四日の会式(もとは旧三月十四日なりしも、今は新五月十四日挙行)に、信者二十五人が選ばれて二十五菩薩となり、

中将姫をすくひ上げて昇天する演舞があります。是は姫乃ち中将法如が、現身往生のままにて当麻寺を去らるとき、素より凡夫の眼には其の光景はわからなかつたが、法如の師実雅阿闍梨が以前白狐をたすけた功德により、法衣の袖より法如が二十五菩薩に迎へられて、麻呂子山マロコヤマの方へと姿の消え行くを、遙るかに拝がんだと云ふ伝説のあるにちなんだもので、当日は近国近在の善男善女、是をみんなの境内は雑鬧し、いづれも皆難し有く拝観すと曰ふ。此の二十五菩薩に選ばれる者は男にて、いづれも一週間前より精進し、又中将姫たるべき役目の者は別になく、是は人形を使用するものなるが、此の演舞中、中将姫たるべき人形をすくひ上る役目むつかしく、今生存するや否や不明なるも、此の付近に通称「観太」と呼ばれる男つとめしと曰ふ。此の男は太助（姓は何といふか知らざるも）といふ酒屋なれど、観音菩薩をつとめる事上手なる故、観太といふあだなを頂戴したもので、又俗信によれば此の会式に二十五菩薩の役目をつとめた者は、死するも身体が硬くならない、夫れは万人に拝がまれたからじやと申すのです。面白い咄では在りませんか（当麻寺に就ては、家人の取調べたる咄多く、土俗研究に素養なき女なれど、小生に報告せむとて随分苦勞したる由なり）。

雑誌『太陽』に鼠に関するお咄の出でざりしは、不審の一となつて居ましたが、事情判明、憤慨の至りに存じます。館主は知らぬであらうが、例年正月より掲載の御咄は、不断民俗学に興味を持たざる人にも注目せられ、十二支全部完結後は、必ず単行本として世間に現るであらうとの風説すらあつたのです。如何に我利／＼本位と曰へ、余りの仕打ちに可レ無レ之歎。かかる本屋は、どうせ往生際は

よろしからざる可く、金儲けても馬鹿息子、不貞腐れの娘を生んで、身代を丸潰すは決つてゐる。一時『太陽』も民俗方面の記事を歓迎する気配見受けられしが故に、私も昨年初め、試みに卑稿を投寄した事ありましたが、無名の士が原稿料とりに寄稿したとても思ふたのか、夫とも価値がないと認められてか、没書の運命に遇ひました（私は不用なら返してくれと態々付記してあつただけれど）。しかし、是位で屁古垂れる私ではない。どうせ世間で金儲けばかり口にしてゐる連中が、我々の研究に目をくれる筈はないのである。自分ではなかつたのであると自覚して、一段勉強する氣になつたのが、せめての思やりでした。此点から考へると、例の『民族と歴史』が、まだ嫌な顔もせず卑稿を載せてくれただけがお愛嬌さまでしたが、是も際物師的に震災号を出して、所謂「颯の最後屁」で（『歴史地理』に併合したと言へ）廃刊になつたのは御承知の通りです。

御写真下さる由、何より珍重に存じます。「書家の書と詩人の詩とは嫌なもの」と申しますが、実際又そうですが、学者の書位、氣品あつて氣持のよいものはありません。されば私は玉章も大事に保存してあります。然るに此の上御写真下さるといふ事は、何といふ嬉敷い事でありましょう。粗末には決して致しません。前以て御礼申し上げます。先生の御手蹟、貫名に似たるころあり、而かも脱俗無類、御修養のしからしむるところと欣羨致して居ります。

今夏御計画に就ての御案内、千万忝く、余暇あらば是非おもしろいと思ふてゐますが、奉公人の身で旨く都合がつくかどうか懸念致してゐます。二十一日付並に二十一日付玉章に対し、御返事可レ致

往復書簡集 (3)

(笠井純二)

事まだく残り居り、早く執筆致さねば、卑諺「惣嫁のオソ、あ  
とがつかへる」で気が落付かぬのですが、何分終日勤務で疲れます  
ので、本日も是にて筆を擱きます。 敬具

省三 頓首

南方先生 侍史

私は下司性に生れ、兎角野卑な言辞を弄する癖あり。幾重にも御  
容赦の程、願上げます。